

JWES-WM-5701

熔接棒の研究

No. 1

(昭和31年度研究経過報告)

熔接協会 熔接棒部会 技術委員会

1957年4月

序

熔接技術があらゆる生産工業の基礎をなしていることは周知の通りであります。戦後7、8年にして、我國の熔接技術は先進国に比しその後れを克服して世界水準に劣らない域に到達したのであります。ここに至る迄の關係各位の御努力は誠に敬服に値するものでありまして我國生産工業の飛躍に大きな貢獻をなしたことは言を俟たないところであります。

本会の専門部会、委員会は天々の立場より、学識経験者、メーカー、需要者が一体となつて応用技術の向上、飛躍に努力し、その成果も大いに挙がつておりますが、熔接棒部会は熔接応用技術の基幹となる熔接棒のメーカーを主体とした部会であり、設立当初より非常に活発な運営を行つておるのであります。数年来熔接工業のイン脈に伴い棒業界も益々飛躍致しましたが、私は協会の性格から推して、メーカー部会の在り方につき種々構想を練りました結果、業界の運営、兼務、技術の綜合組織体とすべきことを提唱致しましたところ、關口部会長は、その趣旨に賛同され、大いなる御協力を賜わり、31年3月に運営会、兼務委員会、技術委員会の三者を併せする部会として新発足したのであります。

爾来、關口部会長は自ら技術委員長として、小社技術者を指導飛躍今日に到つておられますが、此の度技術委員会の1956年度研究成果報告が完成公表されることになりましたことは、新構想部会運営の最初の成果を得たもので、特に意義深いことであり、亦必ずや熔接技術の飛躍に多大の寄与をなすものと信じ御同慶の至りに堪えない次第であります。特に技術委員会は若い小社技術者によつて運営されておるようであります。これら技術者を立派に育成することは委員会として最も重要な任務でもあり、委員各位の今後の精励活躍の程を期待するものであります。この報告書の内容をみますと全委員会は熔接棒に関して多面的な研究を行つてゐることがわかり各位の御努力に敬意を表する次第であります。今後はお優秀な研

-2-

宛に關しては本会機関紙「熔接技術」に掲載されて広く斯界に資されるよう特に希望するものではありません。

昭和32年4月

社団法人 日本熔接協会 会長
工学博士 木原 博

序

1956年の初めに、日本溶接協会会長木原博士と当時の溶接棒部会長関口博士両氏の熱心なる御勸奨により、溶接棒諸会社が協議の上、旧溶接棒部会を改組して強力な新部会を結成するに至り、不肖私が推されて部会長を相勤め今日に至りましたが、お蔭をもちまして各位の御協力の下に大過なく推移し、部会は順調な発展を遂げておりますのは御同慶の至りであります。

此の度、溶接棒部会所属の技術委員会に於て、その研究の第一回報告を発表致すこととなりましたが、新部会結成以来早くもその成果に接するを得ましたことは誠に忻快に堪えない次第であります。

部会結成後日も浅く、研究費も充分とは言えないにも拘らず、かくも立派な成果を収めて下さったことは、委員長始め委員各位の御努力の賜と深く敬意を表する次第であります。

我が国溶接棒界も漸くにして海外諸国に伍する実力を備えて来たかに思われますが、尚一層の努力が望まれることは言を俟たないところであります。その意味に於て技術委員会にかけられる期待と責任は重大なものがあろうかと存じますが、諸賢の御叱正の下に益々研鑽を積み斯界の御期待に副いたいと思っております。

日本溶接協会溶接棒部会

部会長 浅田 長平